

P-055

医療的ケア児と家族の在宅生活を支援する
相談支援専門員の活動の実態

松田 優子¹、岡田 摩理¹、深谷 由美¹、
泊 祐子²

¹ 日本赤十字豊田看護大学

² 関西福祉大学大学院 看護学研究科

【目的】

医療的ケア児(以下、医ケア児)支援において医療と福祉をつなぐ相談支援専門員の役割は重要であるが、活動内容は明確にされておらず、多職種間での共通理解ができていない現状がある。本研究では、相談支援専門員の活動の実態を明らかにする。

【方法】

調査期間：2021年9月～2022年3月

対象：医ケア児の在宅支援に1年以上関わっている相談支援専門員
方法：個別のインタビュー調査。インタビュー内容は属性(年代、相談支援専門員としての経験年数、関わった医ケア児の人数、医ケア児等コーディネーター研修受講の有無)および活動の実態である。分析は、逐語録から相談支援専門員が行っている活動内容を抽出し、質的記述的に分析した。

倫理的配慮：研究者の所属施設の研究倫理委員会の承認を得た。

【結果】

調査対象者は16人で、年代は30～60代、相談支援の平均経験年数は6.6年、関わった医ケア児は2人～90人であった。医ケア児等コーディネーター研修は10人が受講していた。

相談支援専門員の活動内容には8カテゴリーを見出した。【サービス計画と調整のために子どもと家族の状況の把握】では親の話をしっかり聴くなどがあり、【子どもの発達と家族の生活を保障するためのサービス計画と調整】では生活支援のための入浴、ヘルパー、レスパイトなどの調整をしていた。【子どもと家族の状況にマッチした支援者へのつなぎ】では子どもや家族が安心できるように支援者への橋渡しを行い、【利用者の状況と支援の方向性を多職種で共有】では支援者同士の情報共有や役割の明確化などを行っていた。【今ある資源を有効に使えるように働きかける】では行政や事業所に交渉し利用できるよう働きかけなどを行い、【支援者が力を発揮するための段取り】では、医ケア児に慣れない支援者が、安心してサービス提供できる段取りを整え、同じ職種でもカラーが異なる場合に補えるような調整をしていた。【支援者同士の関係性の構築】では、意識的に関係を作り、【地域の社会資源充実のための活動】では、行政に制度の充実の必要性を訴えたり、事業所に障害児事業への参入を促す活動を行っていた。

【考察】

相談支援専門員は、子どもや親に適したサービス調整に努力していたが、支援側の特色を活かし支援者も安心してサービス提供できる調整をしていた。また、現存の社会資源を駆使するとともに、新たな社会資源の創出の活動を行っていた。

P-056

養護教諭養成課程卒業前学生のバイタルサイン観察技術の自信と影響を受けた実習に関する研究

－「養護教諭を志望する」学生と「養護教諭を志望しない」学生との比較－

葛西 敦子¹、山田 玲子²、福田 博美³、
佐藤 伸子⁴

¹ 弘前大学

² 北海道教育大学

³ 愛知教育大学

⁴ 熊本大学

【目的】

養護教諭には、医学・看護学の知識技術を有した専門職として、子供の健康問題に的確に対応できる養護実践力の資質・能力が求められている。養護教諭養成教育では、子供が身体の不調の訴え時に用いるフィジカルアセスメントの知識・技術を習得した養護教諭を養成する責務がある。本研究では、学校看護技術におけるフィジカルアセスメントの基礎・基本となるバイタルサイン観察の知識・技術などの自信の程度、またどのような実習が知識・技術に影響を受けたかの程度を調査した。さらに卒業前段階で「養護教諭を志望する」学生と「養護教諭を志望しない」学生とで比較検討し、今後のバイタルサイン教育への示唆を得ることを目的とした。

【研究対象・方法】

対象は、教育学部養護教諭養成課程に在籍する4年次学生(卒業予定者)108名(A大学23名、B大学20名、C大学36名、D大学29名)であり、有効回答103名であった。調査方法は直接配付質問紙調査法、調査時期は令和4年12月であった。調査内容は、(1)卒業後の進路を「養護教諭を志望する」「養護教諭を志望しない」を尋ねた。(2)バイタルサイン(①体温、②脈拍、③呼吸、④血圧、⑤意識状態、⑥パルスオキシメーターによる経皮的動脈血酸素飽和度(SpO₂)の《観察技術(測定技術)》、《観察で得られた情報の正常・異常の判断》、《観察結果の対応への活用》などについて、「とても自信がある」から「全く自信がない」(6段階)で回答を求め得点化した。(3)総合的に判断してどのような実習(①看護学実習などの学内実習、②臨床実習、③養護実習)が、バイタルサインの観察に関しての【知識】や【技術】の習得に「とても影響を受けた」から「全く影響を受けていない」(6段階)で回答を求め得点化した。

【結果】

対象学生103名のうち、「養護教諭を志望する」学生は78名(75.7%)、「養護教諭を志望しない」学生は25名(24.3%)であった。バイタルサイン(①～⑥)の合計得点の比較では、「養護教諭を志望する」学生の自信得点は、「養護教諭を志望しない」学生の自信得点に比べ、有意に高かった(p<0.05)。バイタルサインの観察に影響を与えている実習は、【知識】や【技術】ともに養護実習が「養護教諭を志望する」学生が、「養護教諭を志望しない」学生に比べ、有意に影響を受けていた(p<0.01)。

本研究はJPSS科 研 費 21K02621、20H01690 および 22K1095400 の助成を受けて実施した研究の一部である。